

霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第89号

平成20年10月28日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>



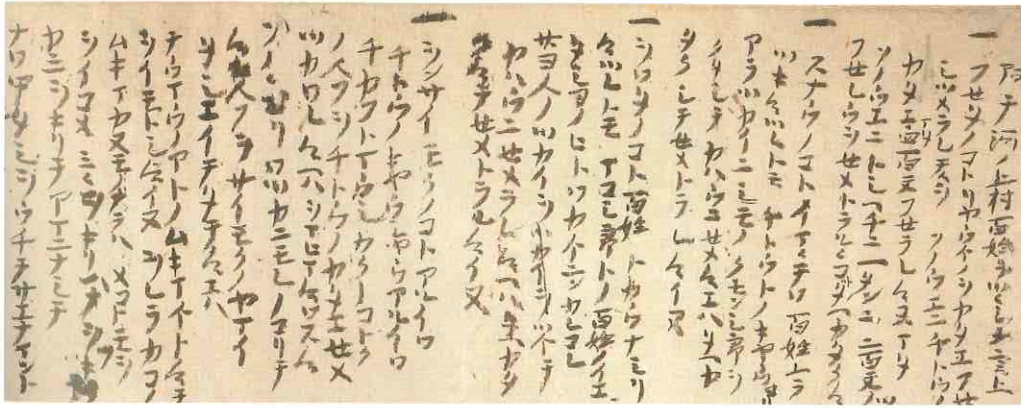
秋の訪れ 伽藍 蓮池にて

企画展 「高野山に伝わる書」
2008年9月27日（土）～12月7日（月）
同時 平常展開催中

企画展

高野山に伝わる書

平成20年12月7日(日)まで



国宝 又統宝簡集 阿氏河庄上村百姓等言上状



重文 町石建立供養願文

高野山の歴史の移りかわりとともに沢山の書が高野山に残っております。

空海が二十四歳の時に仏教に入る決意を記した響誓指帰をはじめ、京都高野山寺において灌頂を受けた僧侶および俗人の名を記録した灌頂歴名写、丹生都比売神社から広大な寺領を譲られ、修禪の道場として、高野山を開創するにいたったことを記載した金剛峯寺根本縁起など、書によって高野山の歴史をうかがうことができます。

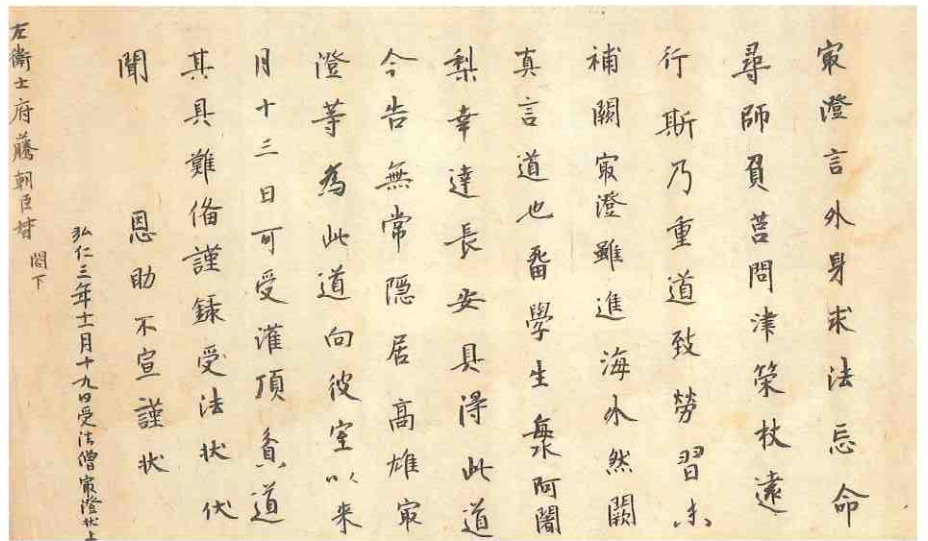
戦国武将と高野山の関係も深く、有力者の多くと師檀関係がもたれ、高野山への宝物寄進も盛んに行われていました。

企画展では、新館第二室に能書家で知られる弘法大師画像と嵯峨天皇画像、高野山と師檀関係がもたれた戦国武将の中から真田幸村像、武田二十四将図、武田勝頼妻子像を展示し、第三室では弘法大師の自筆である響誓指帰、高野山に伝わる写経類の中から紺紙金銀字一切経、細字金光明最勝王経他、戦国武将の書状など国宝四件、重文四件、県指定一件、未指定十六件を展示致します。

書とともに高野山の歴史を感じ取っていただければ幸いです。



重文 金剛峯寺根本縁起



伝教大師書状案

主な出陳品

国宝

- ・紺紙金銀字一切経 金剛峯寺
- ・又統宝簡集 金剛峯寺
- ・響響指帰(上) 金剛峯寺
- ・細字金光明最勝王経(上) 龍光院

重要文化財

- ・紺紙金字一切経(荒川経) 金剛峯寺
- ・金剛峯寺根本縁起 金剛峯寺
- ・梵本大般涅槃経断簡 宝寿院
- ・町石建立供養願文 金剛峯寺

和歌山県指定

- ・真田幸村自筆書状 蓮華定院

未指定

- ・弘法大師像(真言八祖像の内) 金剛峯寺
- ・弘法大師入定図 金剛峯寺
- ・嵯峨天皇像 金剛峯寺
- ・両界種子曼荼羅図 円通寺
- ・武田勝頼妻子像 持明院
- ・武田二十四将図 成慶院
- ・真田幸村像 蓮華定院
- ・風信帖写 金剛峯寺
- ・灌頂歴名写 金剛峯寺
- ・伝教大師書状案 金剛峯寺
- ・紺紙金字妙法蓮華経 金剛峯寺
- ・茶紙銀字妙法蓮華経 金剛峯寺
- ・五悔文 宝寿院
- ・秘記 高野山三鈷松 宝寿院
- ・武田信玄公寄進状 成慶院
- ・北条政子自筆書状 金剛三昧院

収蔵品の紹介 63

国 宝

聾瞽指帰

弘法大師筆 二卷

紙本墨書 平安時代

金剛峯寺

(上巻) 縦28.3 全長1011.6cm

(下巻) 縦28.3 全長1176.0cm



上巻(巻首)



下巻(巻末)

弘法大師空海が延暦十六年(七九七)、二十四歳の時に撰述した著作である。聾瞽指帰という題名には、仏の教えに暗く聞く耳を持たない者に教えを指し示すという意味が込められている。官人としての出世を期待され入学した大学を中退し、仏教

に入ろうとする空海に対して、反対する親類、知人に仏教の道に進むことを伝えたものである。内容は儒教、道教、仏教の三教について、儒教は聾毛先生、道教は虚亡隠士、仏教は仮名乞児という三人の人物を登場させて、各々の信ずる

ところを述べさせながら、最後には仮名乞児の説く仏教の教えに深く感服するというものであり、その仮名乞児こそは若かりし空海自身を表現していると考えられる。首題や尾題に聾瞽指帰一巻と書かれており、もとは一巻であったと思われるが、全体が二十一mにもなる長巻であるため、後世上下二巻に分割されたと思われる。料紙は縦に簾目のある上質の麻紙を用いた料紙「縦簾紙」が使われている。縦簾紙を用いた書跡は嵯峨天皇の書「光定戒牒」などの品が挙げられるが、八世紀から九世紀の書跡に集中しており、料紙に関しても特別な配慮があったことがわかる。空海の自筆と認められるものであり、書体は行草体を中心とし、ままた雑体書風を交え浄書されている。書はやや硬いが筆力があり、後の風信帖に見られる書風とは異なる。空海は能書家としても知られ、嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆のひとりに数えられる。

サルスベリ・百日紅・さるすべり

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

和名は、幹がすべすべしていることからのサルスベリ（猿滑）、花期の長いことによるヒヤクジツコウ（百日紅）の別名がある、この花木が高野山でも、八月下旬から咲きつづけています。

高野山霊宝館を囲む「霊宝の鎮守の杜」の林内にも、猿滑ということは勞せずして判るのですが、天空を仰ぎ、他の樹木の葉枝を、かき分けるような気持ちで観



ヒヤクジツコウ



霊宝館のサルスベリ

て、やっと百日紅と納得できる幹周が一・二メートル、樹高八〜九メートルの大樹があります。

このミノハギ科のサルスベリは、中国南部が原産地で、花は紅のほか白、紫紅、紫のものがあり、中国名は紫薇。

わが国へは元禄年間（一六六八〜一七〇三年）には渡来していたそうです。すると、大公方の異名のある綱吉によって「生類憐みの令」が布告・実施され、芭蕉が俳諧集「猿蓑」を出した頃には、

日本でも、この花が観られたことになり
ます。

蕪村とも親交のあった俳人・炭太祇
（一七〇九〜一七七一年）が

百日紅 寺中 大方 見えにけり
と詠んでいるように、渡来当初は好んで
寺に植えられたようです。

高野山でも多くの寺院の庭に植えられ
ています。

この木には、花期の長いこと、幹の様
態を誇張しての半年花・千日紅、無皮樹

などの別称も。

花期、幹以外の特徴としては、春の目覚めの遅いこと、淡紫紅色を帯びた新芽（若葉）が出た以後の変わり身の早いこと、六枚の花弁の縁の切れ込み・表面の微妙な縮は自然の妙技。

なお、高野山上に自生し、その幹の性状から、さるすべり（猿滑）という方言名で呼ばれることのある樹木には、クスノキ科のヤマコウバシ（山香）、ツバキ科・ヒメシャラ（姫沙羅）、リョウブ科・リョウブ（令法）、ツツジ科のネジキ（掬木）などがあり、サルスベリも含めて、これらの幹材は床柱などの装飾建材として重宝されています。



リョウブ



ヒメシャラ

連載

高野山の名鐘

其の11

伽藍御社の鐘

井筒 信隆



伽藍境内の西方に、木漏れ日のやわらかい陽光がさし込む木々に護られた位置に、高野山の地主神をお祀りする御社が建っている。御社は高野山金剛峯寺を弘仁七年（八一六年）に開創された宗祖弘法大師空海が弘仁十年（八一九）に山麓天野の地（かつらぎ町天野）から地主神の丹生・高野（狩場）

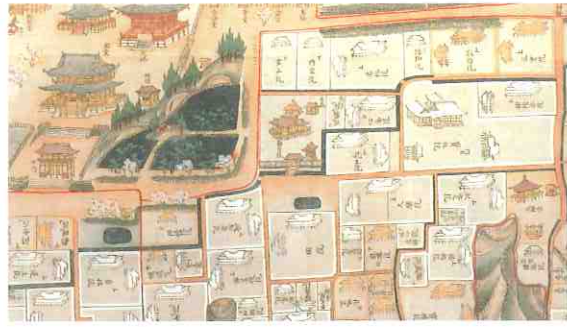
梵鐘の戦中金属供出の実態を垣間見る

両明神を勧請しお祀りされ、明治時代の神仏分離の明治政府の政策の荒波にも屈せず、伽藍という聖域に分離されずに御社が護られてきた。現在の御社の建物は大永元年（一五二一）の西院谷からおこった火災によって伽藍の諸堂塔とともに御社も焼失した。早々御社は翌年の大永二年に再建された事が社殿の墨書から明らかにされている建物である。この御社の三棟は、昭和四十年五月二十九日付けで重要文化財「金剛峯寺山王院本殿」として指定されている。

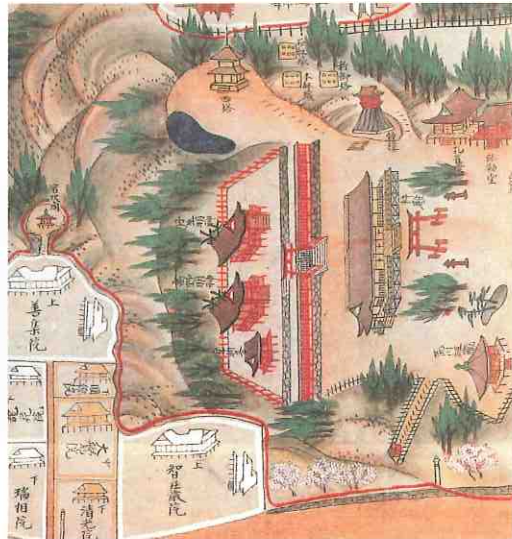
御社本殿の前方には、さまざま高野山における地主神信仰にもとづいた神事法会などが執行される拝殿が建っている。その拝殿の北側に鐘楼が建っている。鐘楼には「御社の鐘」と称される梵鐘が吊られている。この梵鐘については、水原堯榮師著『高野山金石図



説』に御社の鐘として弘化三年（二八四六）の在銘鐘が報告されている。その鐘の笠形部分にある銘文によると、大永元年の伽藍堂塔の焼失を受けて、大塔の鐘とともに天文十六年（一五四七）に御社の鐘が再鑄造された。しかし、その天文の鐘も天保十四（一八四三）の伽藍火災で焼失し、弘化三年（一八四六）に鑄造された釣鐘が御社の鐘として鐘楼に存在していたと坪井良平氏は水原師の説を



御社の鐘の所在としていた南谷大師堂と鐘楼



現在の御社と鐘楼

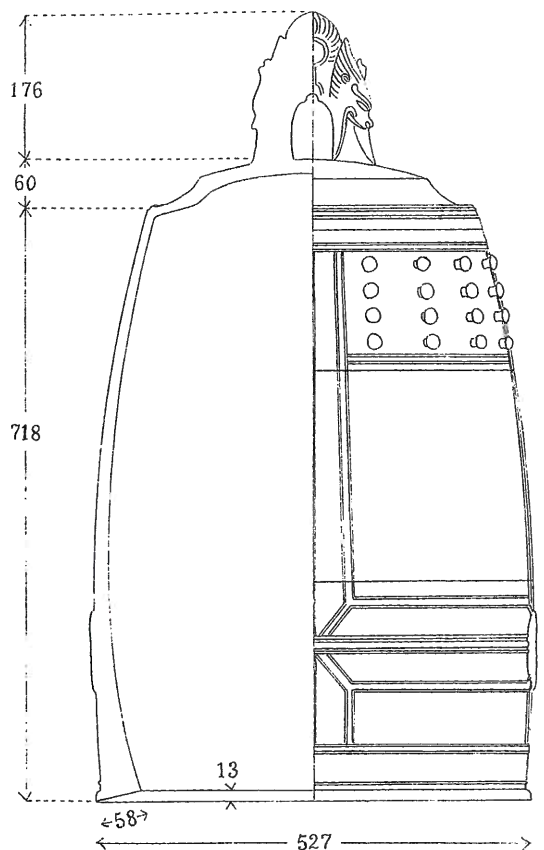
紹介されている。
ただし、水原師が御社の鐘と『金石図説』で紹介された弘化の

鐘は、坪井氏が調査された昭和三十年代には伝わらず、太平洋戦争中の金属供出によって溶解されたものと伝えている。現在、御社の

鐘として鐘楼に懸かる鐘は、水原師が『高野山金石図説』において「南溪鐘」として紹介されているものであり、もとは高野山の南谷の大師堂の鐘として伝わっていたものであると紹介されている。この鐘の銘文によると、南谷の院中の寺院が資金を出し合って弘化三年（一八四六）六月に紀州粉河の住人である福井石見・大塚良房の兩名の鋳物師の手により鋳造されたものであることが判明すると紹介されている。

鐘は総高が約一三〇cmで、口径が約六五cmの胴に余り張りを持たせることのないすんなりした収まりの良い成形の釣鐘である。池の間の四区には「諸行無常 是生滅法」など各区に陽鑄された銘文がある。その銘文は、江戸時代後期の梵鐘の銘文は陰刻されることがほとんどで、銘文が陽鑄されている点は珍しいと指摘されている。また、各区の池の間の堺に表現される縦帯部分には金剛界四仏の梵字を陽鑄した種字が表現されていると報告されている。

高野山に太平洋戦争以前に存在し、水原堯築師が『高野山金石図説』で報告されている梵鐘は多いが、それらの梵鐘の中で戦中の金属供出で失われていった梵鐘の実態を垣間見ることが出来る梵鐘である。



高野山の文化

(一) 巡寺八幡について その六

前奥之院維那 日野西 眞定

(二) 酒殿神社への合祀について

(1) 祭具の種類

これに、「三社の託宣」と「柴燈護摩の法具」を神格化した品とがある。その多くが、現在は行人方の「有志八幡講」から、霊宝館へ寄託されている。以下この品々を紹介したい。

① 「三社の託宣」

実際に、法具として使われていた軸が、霊宝館に保管されている。紙本であるが、その軸裏に「三社託宣 後陽成院様御真筆」、「惣分一臈坊」と墨書してある。高野山行人方の僧が書いたものと思われる。『紀伊統風土記』（巻五・総・八四頁）には、「今の三社は、



同(下)



三社託宣 軸裏の墨書(上)

後陽成帝の宸筆なり、神前の額 又同帝の献じ給ふ所なり」とある。後陽成天皇（二五七〜一六一七）は、江戸

時代初期の方で、この時代に整備されている。人の生きる道について述べた「託宣」を祀っているのである。

② 「柴燈護摩の法具」

この法具を神格化したことは、先ず行人方の本質が、修験道であることを示している点、注目される。そして、こうした事例は、修験道の寺にもなく、室町時代初期、この巡寺が始められた時、行人方によって考案されたものと考えられる。

但し、前出『紀伊統風土記』（同頁）には、巡寺の時使われる「御幣・御旗」については、「元和二年（一六一六）、

故ありて奏聞を經しに依りて」とあり、後陽成天皇の勅許を受けている。それにより、元和四年、「仁和寺ノ宮寛法親王 勅を奉て御登嶺あり、御旗を銅器に藏めて 勅封を加え給ふ、爾りしより、是を御神篋と称し奉る。」とある。なお、南なると龍公、つまり紀州徳川家の初代徳川頼宣からも、「御紋附の御覆」を寄附されている。

法会そのものも、厳肅且煩雑なほど丁寧なものであった。一方、学侶方で行われていた、巡寺信仰による堅精両明神の一年毎の交替は、簡素なものである。これは、学侶方と行人方との性格の異りであろうか。その巡寺の様子も、行人方の巡寺八幡の場合は、『紀伊統風土記』（同頁）には、「神幸、道路の寺家ともに神燈を排おきる事、慇懃なり」と簡略に記してあるが、かつらぎ町酒殿神社に奉納されている絵馬を見ると、その盛大さを知ることが出来る。



御神篋を運ぶ

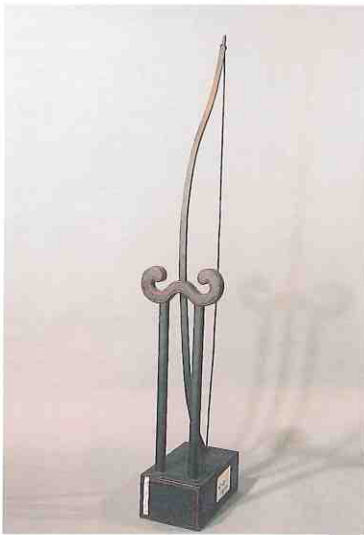
これは、江戸時代末期に、行人方によって奉納されたものである。

次に、「柴燈護摩の法具」を御神体化した品で、現在霊宝館に保管されているものを紹介する。これらは、全て鉄製である。

宝刀 一本、全長七十九センチメートル（台共）、刀身五十九センチメートル

刀身に、「八幡大菩薩 天正五年八月十五日作」と刻まれている。天正五年（一五〇七）作であるが、この宝刀を「八幡大菩薩」と信じて、作ったものかと思われる。

弓 一器、一百二十一センチメートル



弓



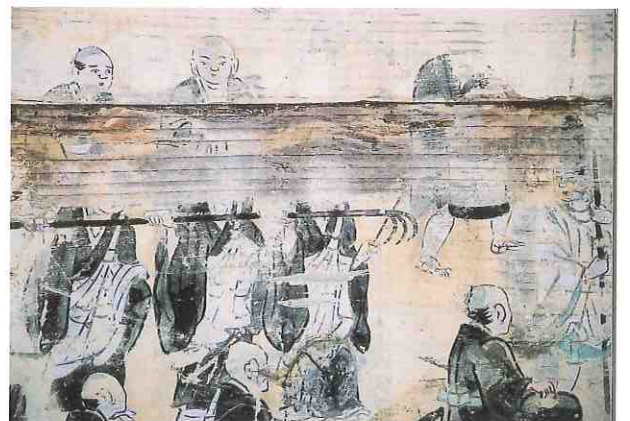
宝刀（台付き）

ル
矢 三本あるが、鏑矢である。二本は完全であるが、その中の一本に、「天狗吉久□治平太作」と、作者の名前が刻まれている。絵馬によると、弓二本、矢五本が描かれているように見える。
以上であるが、これ等は天正五年（一五〇七）に作られており、この時にも整備が進んでいることが分かる。
熊手 現在かつらぎ町の酒殿神社に祀られている。明治二年（一八六九）

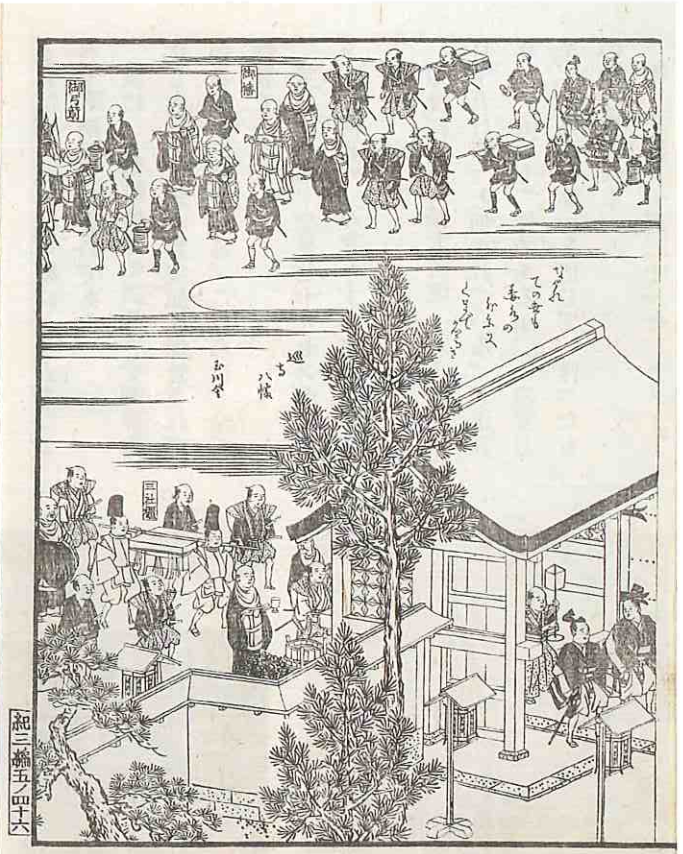
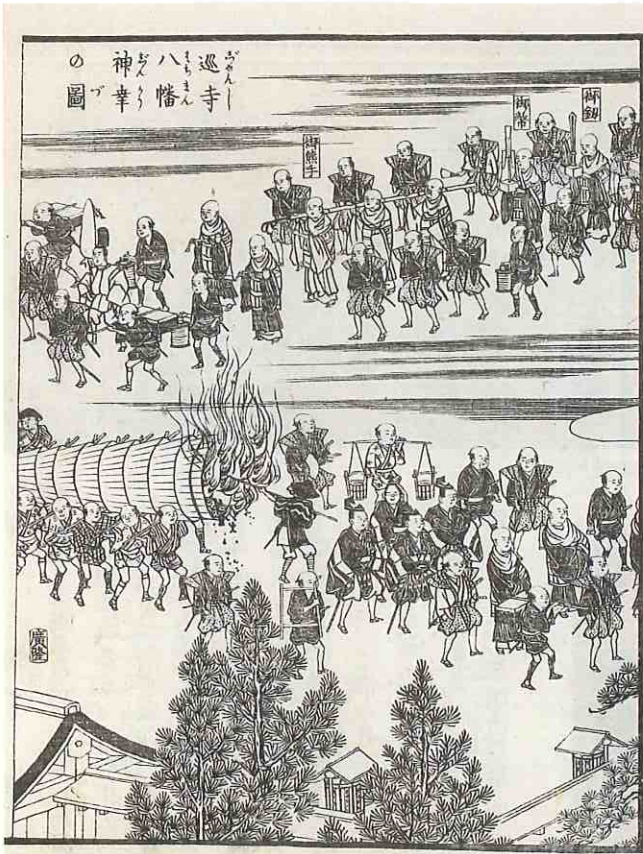
の神仏分離のために、兄井地区に返されたが、さらに小社会併の動きにより、酒殿神社に移されたことは、本稿（その四）に詳しく述べたので、ここでは簡単に記す。「熊手」と高野山では呼んでいるが、実際は、柴燈護摩の時に使われる「火掻き棒」のことである。長さ四・一メートルあり、その先が「三又」に割れている。絵馬では、三人の僧によって担ぐようにして運ばれている。



絵馬に描かれた宝刀・弓矢を運ぶ姿



熊手を運ぶ姿



『紀伊国名所図絵』の巡寺八幡神幸の図

③鈴



鈴の「神功」の字

靈宝館が保管している有志八幡講の品の中に、金属製の鈴が一個ある。表面は金色をしているので、金泥が塗られているのかと思われる。高さは、十七・五センチである。「有志八幡講十八ヶ院」と刻してあるので、有志八幡講員の十八ヶ院が寄進したものと考えられる。

問題は、鈴の三面に、大きな字で、「神功・皇后・辛巳元」の字が陽刻してある。この「辛巳元」は、『紀伊風土記』（五・総・八四頁）の「応神天皇紀」によると、神功皇后は勇猛なお方で、武内宿弥を従え、朝敵忍熊を退治したが、その戦いの中で、先帝仲哀天皇は没したとある。その年号が、「辛巳ノ年二月」と記してある。「辛巳ノ年」は、「元年」である。この頃は、日本の歴史では、神話の時代で、事実関係は明らかでない。しかし、宇佐八幡信仰の中では、神功皇后は伝承の上では中心的人物なので、この鈴に皇后

の名を陽刻している。

なお、この鈴は、金泥が塗られており、実際の行法に使用したものではなく、祭礼用のためのものと思われる。

以上で、「柴燈護摩の法具」等を紹介した。そこで、『紀伊国名所図会』（三編六二六〜六二七頁）に、「巡寺八幡神幸の図」がある。その図中「御熊手」「御幣」「御劔」「御弓箭」「御幡」と、主な品の名が記入されている。「御幣」は、その場で作られる例が多く、今は取り上げる必要はないと思われるが、「御幡」は存在が不明である。

以上で、祭具について、①「三社の託宣」、②「柴燈護摩の法具」で各品を紹介したが、全体的な流れからみると、②は、室町時代後期の天正五年（一五〇七）に整備をし、①は江戸時代初期、後陽成天皇（一五七一〜一六一七）に願い出て、強力な整備を進めていることが領解される。

最後に、巡寺八幡の御神幸には、非常に多くの人が参加しているので、分かる限り触れておきたい。これには、酒殿神社所蔵「高野山鎮座中渡御図」と、『紀伊国名所図会』（三編）に掲載された「巡寺八幡神幸の図」とがあることは、既に述べた。しかし、「高野山鎮座中渡御図」の方がすぐれている。この両者の中で、異なっているのは、

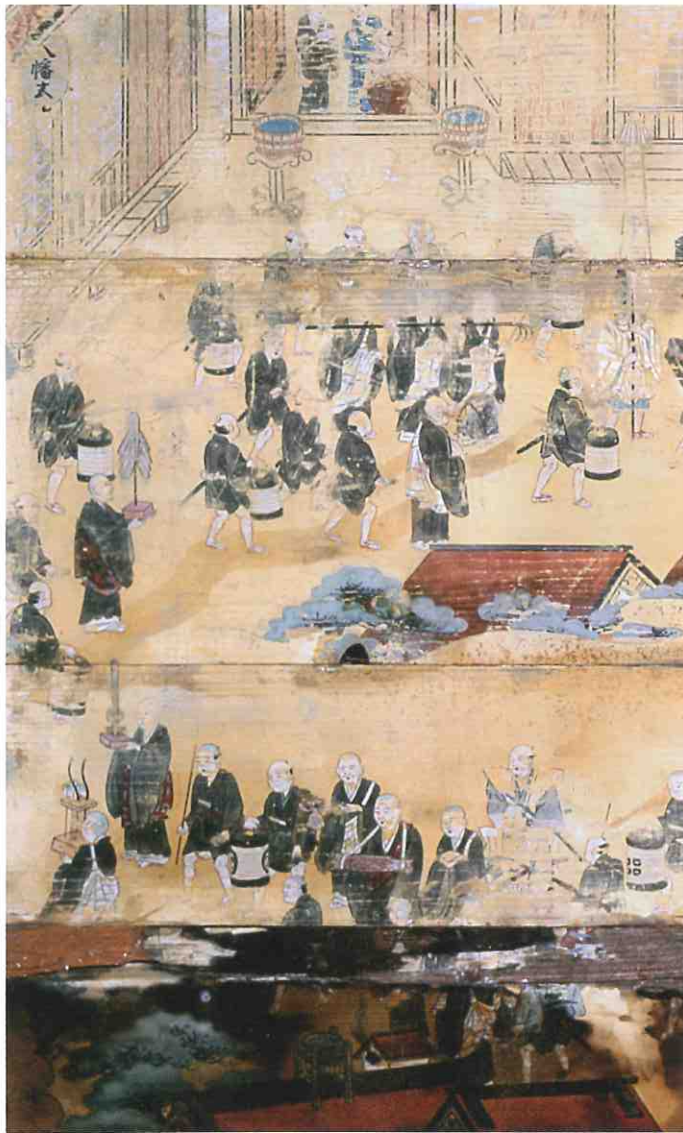
「巡寺八幡神幸の図」には、先頭に「三社櫃」が担がれている姿が描かれている。この中には「三社託宣」が納められているが、実は、この櫃を次の当番に運ぶのは、神幸する前日なのである。同じ絵の中には描けないことであるが、『紀伊国名所図会』の著者が、参考に描かせたものと思われる。

『紀伊続風土記』（五・総・八三頁「巡寺八幡宮」）によると、毎歳二月七日と七月二十日の二度、御神幸は行われる。つまり半歳毎に当番は変更したのである。この巡寺八幡を迎えて祭祀している間は、「一臈坊」と呼ばれ、行人方のトップとして権威を持つこと

が出来た。この巡寺八幡は、行人方（総分方ともいう）の神幸を描いているが、一面その盛大さを示すためのものであったと思われる。

この巡寺八幡を祀ることを出来たのは、「上通」三十箇院であった。江戸時代には、寺領二万一千石の分配のために、学侶・行人方寺院は、上・中・下通の三段階に分けられた。聖方は、無録のために、この三段階を設ける必要はなかった。江戸時代は士・農・工・商という階級制度の時代であるが、これに影響されてか、これと同様な階級を持たされた。

上通は三十箇寺となっているが、



高野山鎮座中渡之図部分 酒殿神社

『紀伊続風土記』には、「古来は六十箇院あり」とある。何時半減したかが疑問になるが、元禄五年（一六九二）の所謂「元禄の聖裁」と学侶方が称している時ではないかと思われる。幕府・学侶方が組み、行人方を丁度キリスト教に対して行った「踏み絵」と同じようなことをしている。『高野春秋』によると、元禄五年七月二十五日から二十九日までの五日間、上使本多紀伊守・高木伊勢守・柴田七左衛門の三人が幕府から派遣され、紀の川に面した紀州徳川家の橋本御殿屋に詰め、河原に集められた行人方の僧二千四百人の裁判をした。一度に二百五十人を河原

に並べ、幕府と学侶方に従うか、否かを簡単な條文にしたものを読み上げ、否と答えると、罪人として島流にした。その数六百二十七人であった。その中に、「上通五十四箇院・中通二百一箇院・下通二百二十三箇院」があったと記している。これほどの大変革はその後には無いので、この時ではないかと思うのである。

もっとも、もと六十箇院有ったのが、五十四箇院減ったので、六箇院しか残らなかつた筈である。しかし、「御請け行人」と云い、幕府・学侶方に従う意志を表した僧達は、高野山に帰ることが認められたので、その中から補充したのではないかと考えられる。

再び、『紀伊続風土記』（前出）の記述にもどるが、上通の三十箇院が巡寺八幡を祀る権利が認められたのであり、その総員が神幸に参加せねばならなかつた。そのために、僧の姿が多いのである。

次に目につくのが、武士姿の人々である。これは「寺侍」で、各院には一人、必ず居たのである。三十箇院の僧が皆自院の「寺侍」を連れて参加したと思われる。日常でも、僧が武家姿の人を伴っている姿が、他の絵図の中にも認められる。侍は貴人の身边に「侍らう」ことから名付けられたと云われるが、江戸時代には、高野山にはその制度が

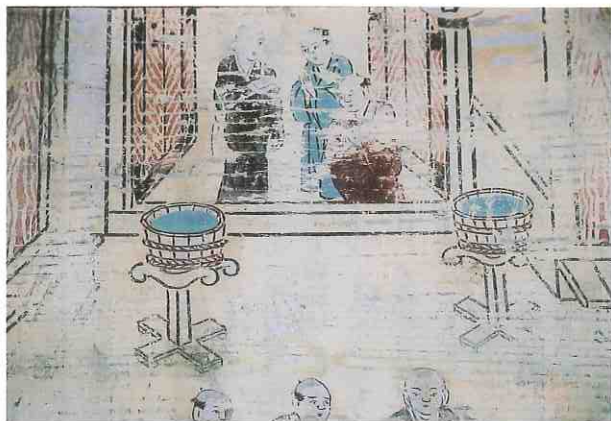


椋の水で手を浄める（同前）（泉涌寺提供）



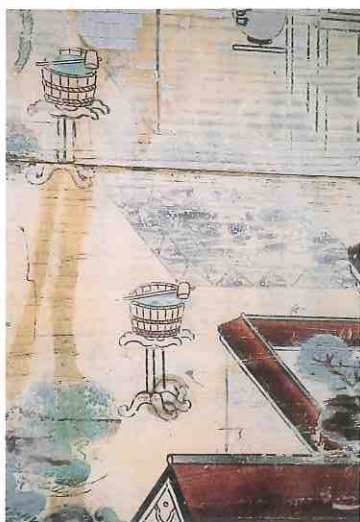
入口に椋と角盥を並べる（泉涌寺提供）

あったのである。このことは、明治初年に金剛峯寺に提出された各院の住民報告書に認められる。
次に、松明を担いでいる人々は、一般農民だと思われる。これは金剛峯寺

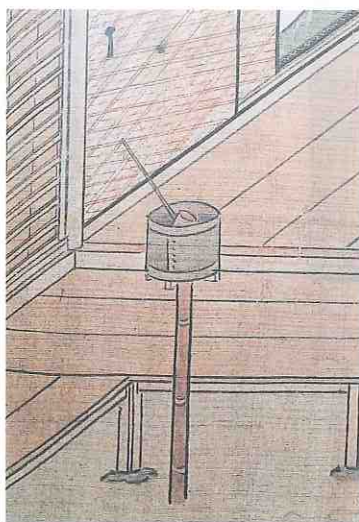


当番の院の門に置かれた手水鉢

の寺領に住む人達だと考えられる。寺領は、学侶方と行人方が分けて領していた。学侶方は、分けられた寺領を、各院が直接支配をした。そのために、住民から「地頭」と呼ばれていた。一方行人方は、その全部を一括して支配し、それから上った分を分括して渡される形式を取った。しかし、各村には庄屋があり、その人達との交流はあったのである。事があると連絡して協力をしてもらっている。その農民を率いる庄屋のような人の姿も認められる。最後に、酒殿神社の「高野山鎮座中渡之図」に描かれている当番の院と、次の当番の院の門前に置かれた「手水鉢」については、目下、高野山教報に



次の当番の院の門に設けられた手水鉢



手桶（『法然上人絵伝』より）

連載中であるので簡単に触れておく。
高野山で、この事例でもっとも古い記事は、天治元年（一一二四）高野詣された鳥羽上皇の時、中院（現竜光院）に参詣された上皇に対し、「椋・盥（角盥）」で手を浄められている（『高野御幸記』）。この様子は、泉涌寺当局のご協力により、現在でも皇族またはその御使が同寺に参られた時に、使われていることが分った。
しかし、高野山の「手水鉢」が今の姿になるには、中世の高僧又は貴族の家で使われていた、「手水桶」の存在

を考えなければならぬと思う。「高野山鎮座中渡御之図」は、江戸時代末期に描かれたものと考えられるので、その当時には、巡寺八幡が当番の院を出る時には、水桶だけで、これを受ける次の当番の院では、水桶に酌が添えられていた。但し、下は、水を受ける杉枝が地面に置かれていた。これを今の様に、細長い形の桶を造り、杉を盛ったのは、明治時代以降だと思われる。現在絵の資料としては、これしか見つかっていないので、貴重な資料といえる。

註①

高野町本覚院はもと聖派であつたが、近世の同派の基本的文書を多く持っている。その『本覚院文書』中の、寺社奉行と三十六組頭中との書簡中、「御尋二付キ言上書」に、「信長公、高野山所領召取ラレ候迄ハ、七分ノ一、聖方工配当之レ有リ候得バ、其ノ後秀吉公二万石山内エ附與、其ノ節因由有テ、右配当モ受ケズ。無録ニテ罷在リ候ニ付」(以下略、原文漢文、一は日野西が付した)「近世の高野聖小考」その組織と活動」山岳修験学会で発表。

高野山交通史

高野参詣への自動車道

高野山にまで電車とケーブルカーがつながる以前の話です。明治以降における近代化への歩みの一つに、交通機関があります。そのなかでも、人や物を短時間で輸送させる鉄道は、いち早く発展しました。

大阪（汐見橋）から高野山までの約六十四kmの区間に鉄道をつなげる計画は、明治二十七年（一八

九四）頃にはすでに立ち上がって

いたと思われ、それは「堺橋鉄道」から「高野鉄道」に改称して、会

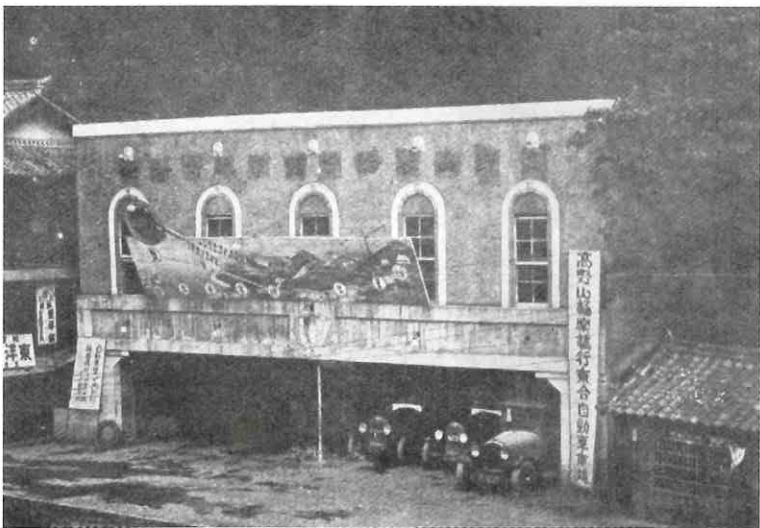
社が再設立されていることからもうかがえます。しかし、標高九百

メートル近くの山上まで鉄道を通すのは決してたやすくはありません

でした。実際に極楽橋駅から山上までのケーブルカーが開通したのは、明治二十七年から数えて、



高野山参詣自動車案内
高野参詣自動車会社による案内パンフレット。



高野山参詣自動車会社（高野下駅前付近）
右の看板には「高野山極楽橋行乗合自動車乗場」とあり、車庫の上には、参詣自動車道路図が掲げられているようです。

三十六年後の昭和五年（一九三〇）六月となりました。

◇ ◇

時代が下ると、同じ交通機関でも鉄道による大量輸送方法とは別に、少人数を乗せて走る乗合自動車がありました。

高野山周辺でも、参詣客を輸送する乗合自動車が、大正時代に登場します。この時期、高野山への

登山道は、紀和鉄道（現、JR和歌山線）に高野口駅が出来たことによって、「新高野街道」と呼ばれた県道が整備され、参詣者の主な街道となりました。これにいち早く目を付けた人があって、高野口から推出（現、南海電車高野下駅）までの四kmほどの区間に、三台の乗合自動車を走らせました。その時期は、一説に大正八年（一九一九）四月十五日のこととされています。紀ノ川に鉄橋の九度山橋が架かったのが大正十一年（一九二二）四月ですので、当時は木造の橋を自動車が渡っていたこととなります。

こうして始められた乗合自動車は、当初は個人経営であったらしいのですが、同年の暮には営業主が高野登山自動車（株）となります。そして、最終的には高野山上までつなげる計画となっていたことが、「高野登山自動車」という社名から理解することができます。

◇ ◇

一方、南海鉄道（現、南海電鉄）高野線は、大正十三年（一九二四）に九度山まで開通し、翌年七月に



高野山参詣自動車株式會社 資本金 六拾萬圓 車輛數 高級車參拾臺 輸送力 時間三百人以上 専用道路 三幅幅延長五哩 所用時間 貳拾五分 一歩行スト 山上迄三時間 餘カリマス	
南海電車高野線時間表	高野山下駅より相成谷下り 高野山下駅より相成谷上り 相成谷下り 相成谷上り
橋本行 所定高野下り間 所定高野上り間	橋本行 所定高野下り間 所定高野上り間
發本橋標省道鐵 上り 下り	發口野高線省道鐵 上り 下り



高野山参詣自動車パンフレット
 南海鉄道高野線は高野下駅で終点となっています。「時は金なり!!」というのが参詣自動車の謳い文句でした。
 参詣自動車の専用道路とは、現在でいうと、高野下駅前の国道370号線を高野線のガード下をくぐり、その先で左斜めに登る細い道がこれに当たります。今では九度山・高野両町をつなぐ町道として残っています。

は高野下（九度山町推出）まで延びて、大阪より直通となりました。これに呼応するように、高野下から神谷（現、紀伊神谷駅付近）へ向けて自動車専用道路が整備されはじめました。この時の事業主体は高野登山自動車（株）ではなく、別の高野参詣自動車（株）が行っています。高野下から高野山までの自動車専用道路工事は全体を二期に分け、高野下〜神谷間を第一期工事

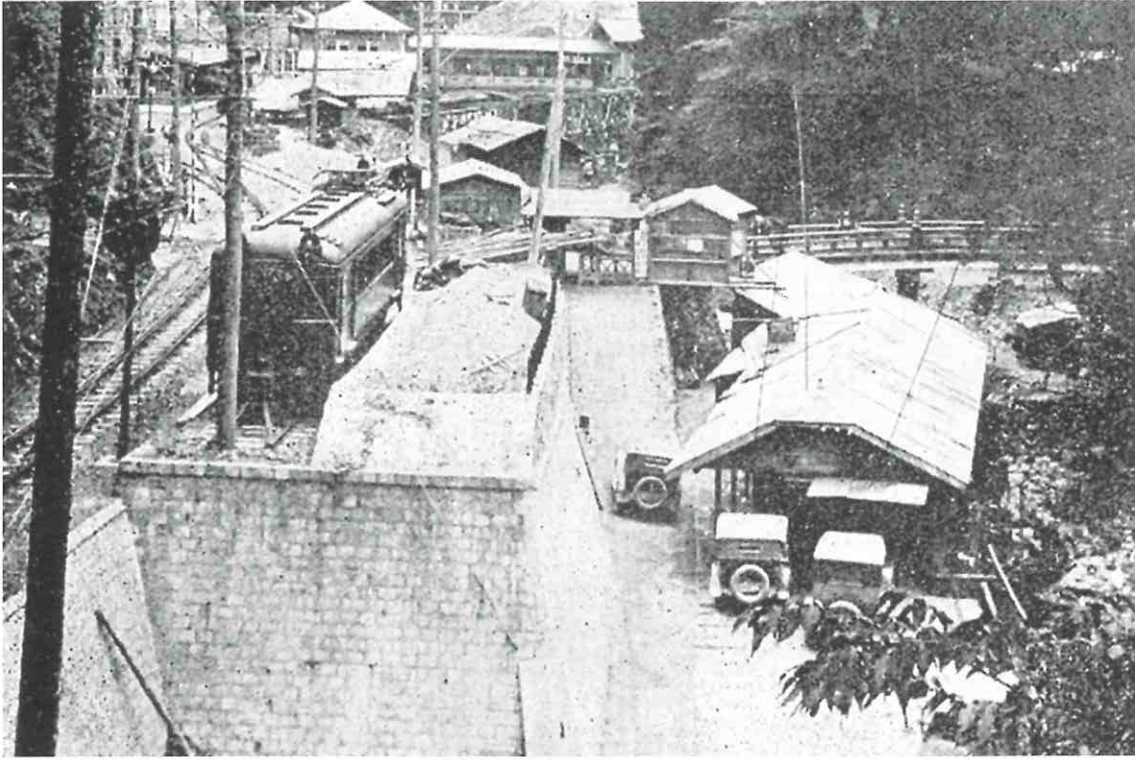
とし、神谷〜高野山までを第二期としたようです。第一期工事は大正十四年（一九二五）の初めには開通し、同年二月十五日になって参詣自動車の営業が開始されました。と同時に、高野口〜推出間を

運行していた高野登山自動車（株）と高野参詣自動車（株）が合併し、以後、全線を後者の会社名で運営していくことになりました。

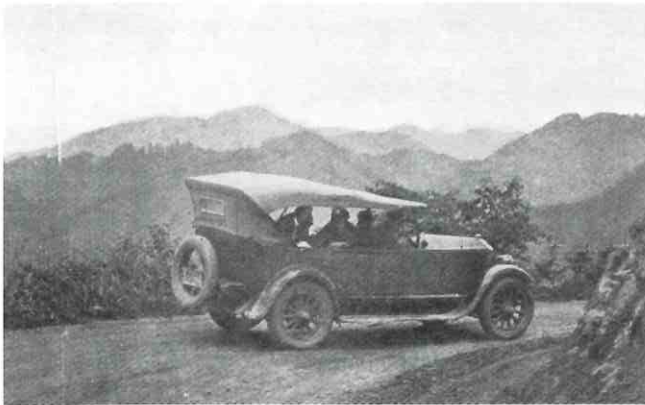
つづく第二期延長工事は神谷から極楽橋に向けて進められ、大正十四年七月三十日に完成します。こうして、当時、終点であった高野下駅から極楽橋までの区間を、参詣自動車は、わずか二十五分前後の所要時間で到着することになりました。さらに、そこから先の極楽橋〜山上女人堂までの道路についても、大正十四年十月をめどに開通予定としていたことが記録されていますので、この区間の道路整備にも、すでに着手していたらしいことがうかがえます。

ところが、結果的には山上までの開通は果たせませんでした。それどころか、昭和四年（一九二九）、高野山電気鉄道（現、南海電鉄）が高野下駅から極楽橋駅までの十km余りの区間を開通させたことにより、徐々に参詣自動車は営業中止に追い込まれました。

高野参詣自動車は、事実上わずか五〜六年余りの短い営業であつ



極楽橋駅付近
 極楽橋駅は昭和4年（1929）に開通しています。右手前には高野山参詣自動車の発着場が写っており、建物内には食堂もあったようです。建物の奥の橋は極楽橋で、左奥には極楽橋駅が写っています。



自動車専用道路を走る参詣自動車
 営業車として利用されたのはピュイック号・ナッシュ号と呼ばれた車両でした。白黒写真はすべて『高野山大観』より複写。



高野参詣自動車専用道路の現状
 現在では道路区間の大半が九度山町道となっています。



周辺地図
 高野参詣自動車道は大正14年（1925）に開通しました。一方、「新高野街道」と呼ばれた登山道は、大正4年（1915）の「高野山開創千百年記念大法会」に向けて整備された参詣道でしたが、現在では廃道になりつつあります。

たことになりませぬ。道路用地買収費や道路開発費など、莫大な費用を投入していることからすると、事業としては決して成功とはいへ

なかつたのかも知れませぬ。
 ◇ ◇
 乗合自動車が日本に初めて登場したのは明治三十五年（一九〇九）

頃で、路線バスはその翌年となつています。高野参詣自動車の営業開始時期が取り立てて早いわけではありませぬ。しかし、自社の専

用道路を持つ乗合自動車としては我が国最初とされ、交通史上において記録されるべきものということができます。
 (M)

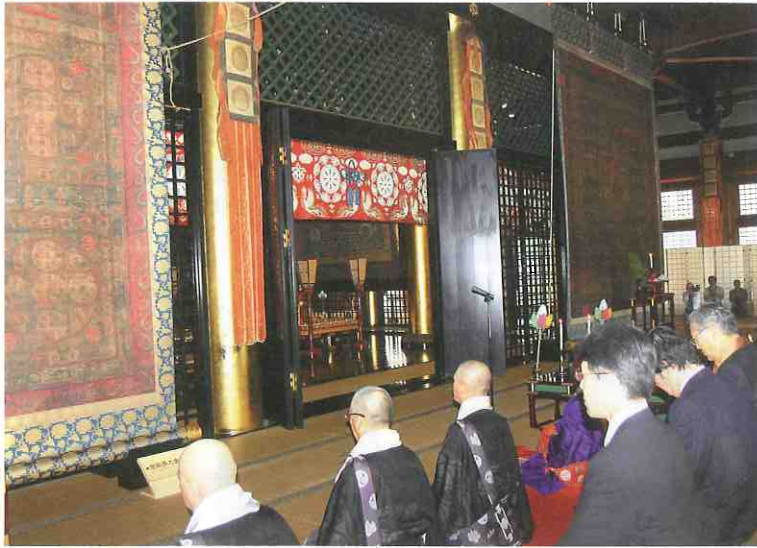
等寸大の複製版 血曼荼羅が完成

霊宝館 平常展にて展示中

平成十五年から文化継承事業として、総本山金剛峯寺と凸版印刷株式会社による共同事業として進められてきた、血曼荼羅復元再生事業の一環として制作された等寸大複製版血曼荼羅が完成し、七月十日に金堂にて奉納式が執り行われました。

本曼荼羅図は、血曼荼羅の保護・保存・継承を目的に行われた血曼荼羅のデジタルアーカイブ業務で得ら

れた、高精細画像データおよびカラーマネジメントのデータを基盤に、凸版印刷のもつ特殊プリント技術により曼荼羅図を制作し、本格的な日本の表具技術を融合させ制作されました。仏画への想いとデジタル技術、日本の伝統的技術が融合した新たな印刷文化をうかがわせる作品です。



奉納式の様子



血曼荼羅撮影風景



撮影素材のデジタル画像処理



表具状況



利用案内

開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

専用駐車場あり

「高野山の秋」

フォトコンテスト作品募集

応募期間

11月1日～11月30日(当日消印有効)

霊宝館では昨年に引き続き、第三回高野山霊宝館もみじ祭「高野山の秋」フォトコンテストを開催いたします。あなたが見つけた「高野山の秋」のご応募をお待ち申し上げます。

(ご応募・お問い合わせ先)

〒648-0211

和歌山県伊都郡高野町高野山306

高野山霊宝館内 フォトコンテスト係

TEL..0736-56-2029